

あそ

9

2022



寄稿

亀田虎童子

蝉の穴きのふは一つ今朝三つ
折れやすき空蝉の足折れてゐる
飲めぬ酒飲んで暑さを逃れけり
盆唄や踊りはせぬが口づさむ
長病みの上手になりし梨を剥く
誰も来ぬ何処へも行かぬ酷暑かな

九月集

佐藤 竹僊

汗不知いまだあるかも老のほぞ

血管が血管またぐ素足かな

籠枕髪からまりて起きにくい

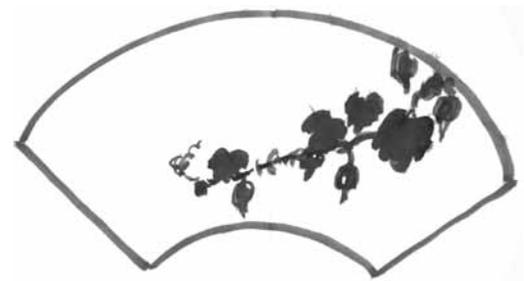
人工芝刺さって立って夏落葉

かるいのは空蟬それとも蟬の殻

山蠅は膝にし家の蠅を打つ

戦争と御出来おできを我慢する

投網となる小春の姉のスカートが



納涼船

篠田純子

乗船口浴衣の一団かまびす喧し

納涼船頭上飛行機通過中

納涼船カオス隣のビールひつ掛る

ふくらはぎに侍のタトゥー納涼船

あめんぼに同心円のついて行く

鰻屋の柁の俎柁の下駄

自転車パンクあをぎり梧桐の花の道



神対神

篠田大佳

フライドチキンに蕩けるをんな夏深む

ナイターや神対神の泥試合

AIによぎる死想や夏の夜

短夜の夢は短しそして今

暗殺の昼に子鳥のよくしやべる



雑詠

須賀敏子

四回もワクチン打って日の盛り
セルフレジやっぱり避けるアツパツパ
梅雨の雷もやしの根っこ取りながら
新聞をじっくり読んで極暑の日
雨だれのごと打つスマホ柚子青し
バブル期を懐かしむ夫茗荷汁
起きている私一人の夜のつまる
新しき扇風機の静か静か

雑詠

都築繁子

プランタのハープを摘めり今朝の秋
対岸の大き風車や晩夏光
ゴルフカート集ふ秋暑の河川敷
ランナーの足取り軽し川晩夏
線状降水帯の言葉覚えし夏果つる



七月

長崎桂子

梅雨晴間あれこれ庭を整理する
はや梅雨明けとまどひ協力を待つ
摂氏三七度朝から危険な七月
紅色暈し天辺も咲き立葵
今日ひとひの助けに甘酒を飲む
黄金色庭飛回る揚羽蝶
昼さがり畳を好む籠枕
台風の来覆ひて縛り用意かな

熊牧場

森なほ子

ロープウェイ往き来している夏の山
手を打ってクッキー乞へり夏の熊
生涯を熊牧場のコンクリート
万緑に「牧場」の熊帰せない
羊蹄山の裾に噴く水靄立てて
刈草に混じる露草馬の口
冷房や王候のごと長椅子に
人恋し梔子の香の夕暮れに



雑詠

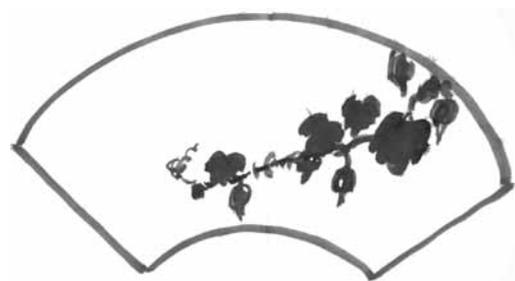
赤座典子

松蟬に引き留められて長湯かな
四回もワクチン打たる戻り梅雨
片陰を行って帰って投票日
エプロンのその一枚の暑さかな
笹団子かの夕涼を恋ひてをり
賑はへる初花やしき我鬼忌かな
業平を諳ずる車夫汗しとど
一期一会ぞメロンのパフェに行列す

夏闌ける

秋川 泉

葉のゆらぎ三毛のびのびと夏至白夜
話しかけ見つめ合ひたるまあ守宮
ぐいぐいとただ歩きたる暑き夜
主なき庭夏草の背丈越え
新盆やわさわさと切る笹竹を
鬼灯や支度ととのふ新佛
回向する僧にこぼれる盆の花
月うちのふたつの訃報天の川



かき氷

七郎衛門吉保

戻り梅雨クレヨン一本鼠色
水無月や湖底に遺物里帰り
四方開け風道つくる夏の朝
旨寝の兎見えて昼月涼しかり
裏庭に墓の住処や何代目
かき氷昨日の夢を追ひて老ゆ
気負へども石の痛みの素足かな
一人逝き右に傾く溽暑の世



七月号作品より

篠田純子・篠田大佳・佐藤喜孝

長い橋渡る天より蝉の声

亀田虎童子

テレビで島と島をつなぎ海の上に長い橋が架かってゐたり、深い溪谷のそこにも長い橋がかかっているのを爽快感ともぞもぞ感がまいなぜになる。

長い橋を渡り始めたときには蝉の声は木立から聞こえてゐたが、橋の真ん中あたりでは、天より聞こえてきたといふのが句意のひとつ。「天より」といふ一語はさういふ写真を飛び出してしまひ、無窮の空間へ読者をいざなふ。「天より蝉の声」に不思議な世界へ導かれてしまった。(喜孝)

生きてゐることにこだはる酷暑かな

亀田虎童子

大正九年生まれの父は召集され、南方の戦地に配属間近に発病したとのこと。父は除隊し、戦友は悉く戦死したと言う事です。終戦記念日に父は黙祷し「自分だけ生きて申し訳ない」と言っていました。この句の核は「生きていることに」にあると思います。私たちは「生かされている」のだということ、忘れてはならないと、諭された気持ちになりました。(純子)

「こだはる」の語彙に、死を受け入れる理性的規範が前提にあることを感じます。一方、人間は

死に瀕すると生きようとする力が働きます。規範と肉体の葛藤が掲句には見られ、生きようとする力が強いことを理性は「やれやれ」と思いながら受け入れているようです。それだけ命の危機を感じるだけの酷暑であり、とんでもない時代に我々は生きています。(大佳)

菜園に人居ぬときの芋戦ぐ

佐藤竹僊

人の気配のない菜園に、風の音が聞こえます。菜園の整頓された様子と芋の豊饒さから、人が手を入れているには違いないのですが、人の気配のない一瞬に風が涼しく感じられます。風と作者の対話を聞いているようです。(大佳)

ついでにと鋏で春の水を切る

佐藤竹僊

何のついでかは知れませんが。春の水を切る、しかも「鋏で」に、先生独特の世界が広がります。春の高揚感に、突如「つもり」の無い行動に出る事があります。楽しくなってきました。しかし、春の水を鋏で切ると言う句には、初めて出会いました。(純子)

夜の川を群れて泳ぐや鯉幟

秋川 泉

夜に鯉のぼりが視認できる都会の川を想像します。泳ぐ主体の想像をかき立てられます。そのまま鯉のぼりを想像しても童話的、諧謔的ですし、魚などが群れをなして泳いでいるところを見上げ

たら鯉のぼりがあったと取っても生命の力強さを感じます。夜の暗さに確かな存在感があります。

(大佳)

夜の森山百合の香に誘はれ

秋川 泉

都会に住み慣れたものには夜の森ともなると五感が復活してくる。この句ははっきりと山百合の香だとわかって導かれて行く。昼には気がつかなかったわずかな香を夜の森は知らせてくれた。神秘的な作品。(喜孝)

九州で聞く老鶯や男前

七郎衛門吉保

九州男児のイメージに重ねて、美しい老鶯の声に力強さの加わったイメージを喚起させます。或いは、スマートな声なのかもしれませんが、「男前」の性質は読者の想像に委ねられています。旅の情感も伴って、老鶯の声に新鮮さを覚えつつ、圧倒されます。(大佳)

黒川の湯巡り木札風薫る

七郎衛門吉保

昔は一家に一揃ひ百科事典が備えられてゐた。私も欲しくて神田の古本屋街を歩いたことがある。さういへば内藤悦子さんはブリタニカ百科事典の編集に携はられたと聞く。といふ話は遙かな昔話。今は何かあればネットである。木造りの旅館が並ぶ黒川温泉はモニタを眺めてゐるだけで涼風が吹ひてくる。湯巡木札とは黒川温泉の一つの売りで、この木札で三か所の温泉に入れるといふ人気商

品であるらしい。この句を取り上げたのはネットの力に後押しされた。(喜孝)

東をどり老妓の腰の確かなり

篠田純子

東をどりは新橋演舞場完成以来行われている催しで、新橋芸者の技芸を磨く場として興ったときれています。それが、お座敷ごとの競争の意味を持つようになり、病疫退散の願掛けとしての性格を持つようになったとのことです。長年の鍛錬で基礎がしっかりしていて、気合も十分な老妓の舞台は素晴らしかったと感動する作者です。(大佳)

墓経の僧青つむり汗ひかる

篠田純子

現今有髪の僧を多く見受ける。いや、有髪の僧の方が珍しいかもしれない。日の光の下、経を上げてゐる僧の青つむりに光る汗に読経より関心を持って見てゐる作者である。つむりと詠まれた僧はまだ若い人であらう。「声明のつむりのひかり黄菊かな 純子」(喜孝)

厭戦の街のタルトにとまる蜂

篠田大佳

銀座のオープンカフェに、サマードレスに身を包んだマダムがくつろいでいます。アイスコーヒーと、チーズタルトを召し上がっていると、蜂が飛んできてタルトに止まりました。平和主義の彼女は、騒ぎもせず、蜂を払いもせず、淡々としています。「最近、銀座に蜂が増えたわね。」と店のオーナーに話し掛けますと、「蜂を目当てに、燕も増えて来たらしいですよ。」と。(純子)

夏なかば朝を指して死語の森

篠田大佳

この句、私には難しい句で採りあげたくなかった。が他の句より魅力があった。朝を指して死語の森は希望と不安がない交ぜになった感情か。夏半ばが朝を指して死語の森に私にはすっと入ってきてくれないのである。(喜孝)

躑躅園マスク外して深呼吸

須賀敏子

マスク越しに呼吸をすることが当たり前前の日常になりました。しかし、長期間「我慢」することに疲れてきた昨今です。人のいないところを狙って、マスクを外して思い切り屋外の空気を吸う作者です。ツツジの呼吸も感じられて、束の間の解放感を味わっている作者です。(大佳)

妹の田植も今年限りなり

須賀敏子

句会では取らなかつた。無署名の俳句は敏子さんの句らしいとわかってゐても詠み人知らずとして読む。敏子さんの句と署名が入ればまた別。いつまでも年下であると思つてゐた妹さんもついにその時が来たかと言ふ切ない思ひの作品である。それにしても妹さんのお米のおいしかったこと。先日生協で求めた棚田米コシヒカリは足元にも及ばない。(喜孝)

ラジオは「夜のプラットホーム」昭和の日

長崎桂子

「夜のプラットホーム」は、二葉あき子歌唱でヒットした奥野椰子夫作詞、服部良一作曲の歌謡曲です。ウェブで検索すると、戦前に制作されたものの、検閲により発禁処分になり戦後によく発表されたと書かれています。詞は出征する人との別れを歌ったもので、昭和の日に別離の情感をよりかき立てられます。曲の情報がなくとも、プラットホームの舞台に情緒がたつぷりで、題の力を思い知らされます。(大佳)

庭 一面草は新鮮草むしり

長崎桂子

まさに夏の盛りの草々には葉の先々まで命がみなぎってゐる。黙ってゐたらこの先どうなることかと不安になる。この夏草を「新鮮」と捉えたことに感心した。新鮮な把握だ。この草の勢いに負けぬやう草むしりに励む作者である。(喜孝)

見えねども街に鶯声馴染み

森なほ子

声の主の姿を追ってみても、見つからないことは往々にしてあります。作者は、搜索を早々に諦めて耳を研ぎ澄ませます。切り替えの早さと街の「声」として耳で楽しむ姿勢に、あらゆるものを許す文明的態度が見られます。(大佳)

蛙鳴く三年ぶりの故郷なり

森なほ子

蛙鳴くは故郷を象徴する事柄である。私の故郷といへば自然の匂などひと滴もない。うらやましい限り。日常の忙しさに追はれつひつひ三年もご無沙汰といふことではなく、今のご時世コロナゆゑのことであらう。三年ぶりの故郷の蛙の声に安らぎを得たことであらう。へ逢いたかった三年ぶりに逢えて嬉しや呑もうじゃないか…が空耳に聞こえてきた。(喜孝)

沈黙といふ黙認を悔ゆ蛍の夜

赤座典子

民主主義政治の意思決定に関する句と推察します。後悔の夜に蛍の光がぼつぼつと増えていて、世のことを忘れさせてくれます。今、政治に目を向けると、批判の対象が多すぎて、昨日騒いだニュースを今日忘れていることも珍しくありません。蛍への感動とともに後悔の夜を作者は記録しています。(大佳)

沈黙といふ黙認 といふことはよくありさうなこと。しかしそのことを今作者は反省してゐる。憲法九条を反対もせずに来たことを悔いてゐるといふ大ごとではない。もう少し艶のある話である。これから先は読者の体験に照らし合せてお読みななれば良い。何せ「蛍の夜」なのだから。(喜孝)

焔収集

夕立あと紫蘇の香のせし母の胸 亀田虎童子

ワクチンを打って片白草に來し 佐藤 竹僊

隠沼に一本の棒翡翠立つ 七郎衛門吉保

この暑さ争点にせよ参院選

ストーカーのけはひ定家葛の花の午後 篠田 純子

梅雨晴間キスする鳩に羞恥心 篠田 大佳

夏帽子知らない町の郵便局 須賀 敏子

ひまはりやテニスのラリー響きをり 都築繁子

首里城の美しき面影梅雨明ける

はや葦簀用意に疲れカミモール 長崎 桂子

湧水の波立つほどに黒々と 森 なほ子

通勤の群れに混ざりて夏帽子

青鷺の花魁道中ひとやすみ 赤座 典子

涼風やメタセコイアの高きより

片付や時の止まりて紙魚の跡 秋川 泉

歳時記に書き込みのあり沙羅の花

喜孝抄



馬 篠田純子

二十歳の時、北海道の牧場で初めて馬に乗った。両足で馬の腹を一回叩くと歩き出す。トンと二度叩くと止まった。言うことを聞いてくれるので、可愛さと嬉しさに馬が好きになった。都内でも、山王祭の鳳輦巡行時や、東京駅から皇居へと、外国要人に乗せた馬車を見ることがあるが、白馬は綺麗でつい見入ってしまう。オリンピックの為にリニユールした、馬事公苑へいつか行ってみたいと思ってる。



馬

黄色いビル 篠田大佳

子どもの頃、父が休日に水道橋の外馬券場に行くというので付いていったことが何度かあります。飯田橋の中央線のホームにとても怖い思いをしながら黄色いビルへ辿り着くと、レースを見るでもなく、父からホットドックを買い与えられ、父が戻るまで部屋の隅っこで待っています。待っている間の思い出はありません。人々の往来を観察していたのでしょうか。この時は大人になろうと背伸びをしていたような気がします。

虫袋 森なほ子

子供のころ、近所に馬を飼っている農家があつて、町中では当時でも珍しく、退屈するとたまに一人で見に行つた。大きな腹のその馬は、刈りたての草の山を端からワシワシと食べていた。草に虫袋の花が混じっていたりした。何度も行つたのか、二三次だったのか、よくわからない。

働く馬 秋川 泉

「ここは撞鉢の底。一番行政の行き届かない村だよ」と、母は言っていた。その通り昭和39年の横浜トリムランド開園まで、物語の中にある村そのものだった。農耕の場にも、荷物の運搬にも主に牛が働いていた。道は「牛車」の落し物で歩く時は気を遣った。ある時、寺の普請があつた。その時は馬が木材を引いていた。その馬は、本堂に続く長い石段脇の細い通路を上つていたが、蹄が何回か石段にかかり、踏み抜いた。私はずっと働く馬を見ていた。なんだか馬がかわいそうなの毒な心持ちで見えていた。工事が完了した後、馬の踏み抜いた蹄の後が私を悲しい気持ちにした。馬は物静かな利口な動物であつた。その時『中和田村』は、まだ昔話の世界の中にそのままあつた。私は、世の中から取り残されていた昔のままの村が好きであつた。

痩せ

秋刀魚焼く今年の秋刀魚痩せてゐる

田中 藤穂

野生

恋猫に野生の目あり町に会ふ

関口 ゆき

かはゆくて伏目がちなり野生菊

長崎 桂子

野生菊日と風と波はねかへす

長崎 桂子

断崖の苔むす居場所野生菊

長崎 桂子

八十路

亀鳴くを水面恍惚八十路かな

河合 笑子

きさらぎや八十路長い短いか

芝宮 須磨子

返り花八十路の憎まれ口いよ

芝 尚子

細ぼそと八十路にも似て蜷の道

芝 尚子

問ふことをやめれば八十路寒き春

鎌倉 喜久恵

八十路なる我も仲間の祝箸

森山 のりこ

八十路逝く兄の歩みや鱚雲

七郎衛門 吉保

八十路兄あゝの世とやらに雁渡る

七郎衛門 吉保

屋台

花冷や屋台つぎつぎ灯の入りぬ

森山 のりこ

三代を卯年でつなぐ屋台骨

鎌倉 喜久恵

さみだるる屋台にシート掛けしま

早崎 泰江

焼膳の屋台が照らす石畳

定梶 じょう

客待のクレープ屋台花の下

森山 のりこ

焼薯の屋台に塀の高きこと

定梶 じょう

生薬の飴売る屋台夏祭

鎌倉 喜久恵

お粗末な屋台に溢れ林檎の灯

須賀 敏子

出外れの屋台の椅子に夏落葉

佐藤 恭子

湯気上がる屋台の上に豚の顔

吉成 美代子

暮れ早しみかんの残る屋台かな

佐藤 恭子

料峭の屋台の灯聲多し

長崎 桂子

B級グルメの屋台と並ぶ花篝

七郎衛門 吉保

春がすみ屋台のほひ誘はるる

秋川 泉

野鳥

寒の柿野鳥の賑はひきのふまで

森 理和

秋の池小声で訊ぬ野鳥の名

齊藤 裕子

尉鶴野鳥凶鑑のもどかしく

森 理和

群舞する野鳥の姿山眠る

大日向 幸江

枯れ枝か野鳥の遊びいそがしく

秋川 泉

八ヶ岳

八ヶ岳遠き山辺に蛾眉の月

河合 笑子

若葉光長く裾ひく八ヶ岳

芝宮 須磨子

八ヶ岳横雲にのる秋夕日

東 亜未

八ヶ岳秋は直角三角形

東 亜未

八ヶ岳時々隠す夏の雲

須賀 敏子

残雪の八ヶ岳背に桃の里

須賀 敏子

花蕎麦やたちまち暮るる八ヶ岳

田中 藤穂

八ヶ岳嵐の町や酒家の旗

井上 石動

夕涼や影濃くなりし八ヶ岳

田中 藤穂

八橋

猫柳生ま八橋は母に買ふ

定梶 じょう

湯

湯の沸いて猫には係りなき朝寝

芝 尚子

蛇口からしばらく湯など夏休

東 亜未

ゆつくりと新茶のお湯をなだめけり

芝 尚子

凍豆腐縄目を解いて湯に放つ

須賀 敏子

かたくりの湯の片栗が咲き揃ふ

木村 茂登子

葉を茹でし湯は金盥悴む手

須賀 敏子

白い器に立春の湯を満たしをり

森 理和

停電の壘に湯を入れ春炬燵

田中 藤穂

湯の流るごとき荒川冬の靄

竹内 弘子

復活祭菜を茹でし湯の金色に

田中 藤穂

万両や手湯をすすめる若き女医

田中 藤穂

湯上り

湯上りの頬に乳液春の雨

田中 藤穂

湯上りのほてり紫陽花海の色

田中 藤穂

湯上りに窓のぞくやつぱり無月

長崎 桂子

湯上りの肌ひきしまる夜寒かな

鎌倉 喜久恵

湯上りに盥のラムネ山笑ふ

赤座 典子

ほかほかの湯上りの翌昼の月

赤座 典子

夏めくは夜の湯上りの肌に似て

大日向 幸江

湯上がりの踵クリーム春浅し

須賀 敏子

湯上り処方位盤あり遅日かな

赤座 典子

湯中り

湯中の体ゆだねて夏の宿

鎌倉 喜久恵

湯中りす春の蝶々がこの冬に

佐藤 恭子

噂の姿に見入り湯中りす

森 理和

湯浴み

梅雨の月乳頭の湯に湯浴みしぬ

須賀 敏子

二度三度緋鯉寄り来る湯浴かな

赤座 典子

桃洗ふやうに病人湯浴みさす

田中 藤穂

湯浴みして身は新涼をまとひけり

芝 尚子

愉快

けふ愉快なれば強霜踏みゆく

定梶 じょう

梵鐘や野分一過を愉快がり

定梶 じょう

ゆかし

春一番何やらゆかし蒙古斑

佐藤 恭子

曇り空ゆかしきいろの松の花

長崎 桂子

手折り来てゆかし香満つる黄の小菊

齊藤 裕子

市振の萩ゆかしきを摘みにけり

井上 石動

おくゆかし蛍袋や蘇る

長崎 桂子

短冊の濃き色ゆかし秋風鈴

赤座 典子

床下

春光や視床下部から中枢へ
筍の寺の床下顔を出し
床下に住む子狸や噓せり

篠田 純子
大日向幸江
大日向幸江

ゆがむ

手びねりの湯呑のゆがみ暮早し
梅雨の月軒のしづくにゆがみけり
飯庵の水のゆがみに蝶蜻蛉
枯蓮の揺るるゆがみし池の面

田中 藤穂
鎌倉喜久恵
佐藤 恭子
佐藤 恭子

逝く

「帽振れー」と寒夕焼に消えて逝く
花は葉に人は静かに死に逝くか
のうぜんの散り際が好き彼も逝く
勁草のシツエさん逝く十二月
身に入むや十八のままサガン逝く
向日葵を好みし画家の若く逝く
石夫逝く囀遠き日のままに
母が逝く夢に起され鉦叩
秋霖に逝くテノール歌手の太き咽
立冬や先に逝くなと友が言ふ
餃子喰べて早く逝くべし温め酒
荒星の中の一つや談志逝く
木枯逝く茫茫六十年目のさくら
木枯逝く雲と交はる紫木蓮

松本 米子
関口 ゆき
堀内 一郎
松本 米子
赤座 典子
早崎 泰江
堀内 一郎
斉藤 裕子
鈴木多枝子
芝宮須磨子
堀内 一郎
須賀 敏子
阿部 寒林
阿部 寒林

逝く人に刻経て小さき春の雷
続々と昭和が逝くや暮の声
八十八夜ことり逝く夜に銀の櫂
兜太逝く反戦の牙寒天に
秋に逝く一つ違ひの樹木希林
嘶きて雲の峰飛び駿馬逝く
飯を食べ枝豆を食べ兜太逝く
八十路逝く兄の歩みや鱒雲
兄逝くやあれやこれやと冬の風
「彼岸に逝くは天寿まつたう」言ひあへり
逝く人と醫師とゑみあふ春の果

阿部 寒林
田中 藤穂
七郎衛門吉保
七郎衛門吉保
須賀 敏子
秋川 泉
大日向幸江
七郎衛門吉保
七郎衛門吉保
篠田 純子
佐藤 竹僊

往く

新しき蜘蛛の巣からむ林往く
踏青や娘の道を娘往く
雲雀野の朽ちし一橋蝶と往く
舟で往く若狭の浜の青田かな
ひらひらと尼さまが往く水飢饉
酉年に猫抱いて往く初詣
汽車往くや孤独の人は雪を見る
落葉焚雲の行方を見てをりぬ
つながれし人の行方や秋の風
木枯やオサマ・ペンラディン氏の行方

松村美智子
松村美智子
渡邊 友七
森山のりこ
中川句寿夫
秋川 泉
篠田 大佳
鈴木多枝子
堀内 一郎
田中 藤穂

下石神井日録

10

佐藤喜孝

七月十一日 夜中通常通り目を覚ます。聞いたことのない物の落ちて何かにぶつかる音がする。朝になり出て見ると庭に小豆大の固い実が散乱してゐる。家の中に一本の棕櫚の木が立ってゐる。葉を落さず枯れたまま蓑のやうに身に纏つてゐて見すばらし。まったく気にしていなかったがいつの間にか花が咲き実を付けたらしい。その実が昼も落ちてはゐたのだらうが、夜になると殊更耳についたやうだ。そして自転車置場のアクリル屋根に落ち音が倍加された。原因がわかると夜が楽しみ。枕に耳を当てその音を聞いてゐると山家にゐる気分になりなんと心地よくなる。

七月十六日 雨続き。二十代から育ててきた椿をこちらに来て鉢から抜いて地に植ゑた。小さな鉢から解放されて喜ぶかと思つたらさうでもない。例年だと花の後待つてましたと艶々とした若葉が椿全体からあふれてくる。はずだったが全く元気がない。植ゑた場所が悪いのか。一回り大きな鉢に戻し日当たり風通しを考慮して置く。駄目かもしれないとお酒を注いでお礼を

した。四月のことだ。誰よりも長く私と一緒に暮らして来たので心配。鉢の周りに栄養剤を挿した。三か月たつてやっと細々ながら新葉が出てきた。私ももう少し元気で居られる気になった。

あと三十分は降らぬといふ天気予報。自転車で散歩に。今日行ったことのない道をいくと「天祖神社」に出あった。境内をぐるりと回つて帰路に。雨がぱらつきだしたが濡れずに帰宅。私には適量な運藤。この辺りはみな「天祖神社」、頼朝に関わりのある神社ださうだ。

七月二十五日 網戸から青力マキリがこちらを見てゐる。昨日たしか甘唐辛子に止つてゐた奴だらう。脚をこそぐつてやった。

七月三十一日 庭の雑草も見てゐると栄枯盛衰がある。初めは母子草が黄色い小さな花で席卷してゐたが、葉裏の白い地べたに這ふやうに葉を広げてゐるのが大きな顔をしてきた。裏白チチコグサらしい。私のいふ草の名は正確ではないと思ふので、信用しないやうお願します。チチコ・ハハコとかわいらしいが、蚊帳吊草や箒草の邪魔になるので少し遠慮を願つてゐる。

あとがき

短文の題「月」

今年のお月見はいかがでしたか。以前の住居は三階の窓から広々と空があるので家にゐて月を楽しめた。今は一階周りの家の事情で思ふに任せられない。そこで晩酌後、自転車にのり月に誘はれるまま行ったことのない道を走り月を楽しんだ。表紙の写真はその時の一枚。最近はスマホでしか写真を撮らないが、不思議に結構撮れる。帰りに蕎麦屋さんを見つげメニューにないが、月見そば出来るといふのでお願い。メのお月見をした。

今回の随筆は今年に限らず、名月に限らず、春夏秋冬に限らず「月」で書いてください。よろしくお願ひします。

杖

「俳誌のサロン」で「杖」といふキーワードで一頂

作ってゐる。頼杖・錫杖など多く登場する。中に珍しい仕込杖が。どなたか見たら藤穂さん。「十六夜や天袋より仕込杖 田中藤穂」。八田木枯さんが歎びさうな俳句。季語「十六夜」は藤穂さんの俳句、あそび心である。(喜孝)



二〇二二年九月号
発行日 九月十四日
発行所 〒177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2 一階
電話 090 9828 4244 竹僊房
印刷・製本・レイアウト 表紙・佐藤喜孝
カット/須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ
会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年
ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402
佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)